

ノーベル賞と大学「改革」と「発言」

2月に入り、受験シーズン本番である。長年の大学生活でも、なんだか落ち着かない時期だ。大学センター試験が終わり、前期から後期試験へと続く。出願状況が報道されるたびに、わが大学・学部・学科のことがやはり気になる。少子化や経済不況、さらには受験生の動向や大学「改革」が、学部・学科の受験者数にどう影響するであろうか。

さて年末29日に、中日新聞1面に大きく名市大「改革」構想、わが学部にも関わる記事が載った。記事を読んで、黙っておれない気分になり、久しぶりに「発言」欄に投書しようと原稿を書いた。イライラして書いたためか、残念ながら採用されなかった。いまでも同じ考えなので、原稿を下記に載せておこう。

理学部構想の陰に

本紙12月29日付1面に「理学部の新設 名市大が構想」と大きく報じられた。ノーベル賞「人気」にあやかった記事のようだが、どうも気になることが書かれている。理学部新設の一方で、同大学の人文社会学部の教員を削減するなど、組織再編を進めるという。大学版「スクラップ・アンド・ビルド」のようだ。

名大関係者の相次ぐノーベル賞受賞で自然科学の基礎研究、とりわけ理学部に期待が集まっていることは歓迎すべきことだ。基礎研究の大切さが見直され、再評価されつつあるのは、なにも自然科学だけでない。人文社会科学でも、歴史や文化などの基礎研究が重要なことは言うまでもない。

とかく効率重視で非実学分野が軽視される風潮のなかで、人文社会学部のような基礎研究を担う学部を「リストラ」するのは見過ごせない。はじめに「改革ありき」のような大学改革ではなく、もっと長期的な視野からのビルドを求めたい。学問と大学のあり方が問われている。新学部環境省OBなどをスカウトすると書かれていることも気になる。記事の「出所」と見られる大学当局に真意を聞きたいものだ。

(2009年2月3日 記)